

週日の説教

金 大烈 神父 2011年2月8日(火)

《人間の秤でなく神様の秤 - 私たちが一番素晴らしい道を歩むように望んでいる -》

今日の福音(マルコ 7:1-13)を読んで二つの話を準備しましたが、明日の福音も同じように律法学者やファリサイ派の人に対してのイエス様の話ですので、今日は一つだけ選んで話をさせていただきます。

ある人が、一人で航海するために準備をしっかり整え、船旅に出発しました。しかし、茫茫たる大海で、急に天気が崩れ、激しい風のために船が転覆してしまいました。その人は、生きるか死ぬかの瀬戸際で、必死に泳ぎます。通る船も見えないし、飛行機も見えないので、とにかくどこか陸にたどり着きたいと思います。そして、やっと無人島にたどり着きます。一息ついてから、どうすればこの島で生き残れるかと考え、先ず雨や寒さを避けるために家を建てなければならない、と思いつきます。そして木を切り、その木で、何時間もかけて雨や風を避けられるくらいの建物を造ります。やっと家が出来上がったことに満足すると、次は、寒くなるから火をおこそうと思います。そこで、乾いた枝を拾って来て一生懸命にこすり、火をおこそうとします。しかし、慣れていないのでなかなか火はつきません。何時間もこすり続けてやっと火がつき、「ああ、よかった。」という満足感でいっぱいになります。

ところが、突然強い風が吹きつけて、一生懸命に建てた家に火が燃え移ってしまいます。家全体に火が燃え広がるのを見ながら、その人は呆然としてしまいます。そして、神様に向かって罵る言葉を叫びます。「神様、あなたは本当にひどい方です。私が生き残るためにあれほど頑張ったのに、なぜこんな残酷なことをなさるのですか。」と。涙があふれ、腹が立ってきて、やるせない思いになります。その時、海から汽笛が聞こえ、船が近づいて来るのが見えます。そして、船のスピーカーから「あなたが、木を燃やして救いを求めた人ですか？」という大きな声が聞こえてきました。

もし皆様がこの人ならば、どういう気持ちになりますか？

私たちはいつも人間的な秤で世を量ろうとしています。自分の体のことから、身の回りに起こるいろいろなことまで、全て自分の経験と自分の頭にある知識によって量ろうとします。しかし、それはよく外れます。それは皆様も認めることでしょう。私たちがこの人と同じ立場ならば、たぶん腹が立ってどうしようもなく、自殺したい気持ちになるのではないのでしょうか。しかし、信仰を持っている者として、もっと素直にみ言葉に耳を傾けることができれば、神様の働きに希望を置くべきだと思えるでしょう。

今日の福音の律法学者達は、先祖から受け継いだ言い伝えや人間の秤で作られた律法によって縛られています。律法がなぜ作られたのか、律法の本当の意味は何なのかは忘れてしまっていて、責めることばかりしています。「なぜあの人はこんなことをするのか」と、人の間違いを責めてばかりいます。そ

の姿を見たイエス様は、『偽善者』という表現を使います。そのようなファリサイ派の人々や律法学者達の振る舞い、考え方は、ある意味では私達の振る舞いや考え方なのかもしれません。しかし、私達は気がつかないのです。

神様からの毎日の福音は、私達を悟らせるための一つの恵みだと思います。

皆様、今日の福音も数えきれないくらい何度も読んだ内容だと思います。しかし、今の話のように、一つ一つ自分に置き換えて自分に必要なものを得ようとする心で聖書を読んでいただければ、今までとは違うものが得られると思います。

私たちの秤の基準は神様の御心です。もちろん、私たちにはその御心は分かりません。ただ、神様は誰よりも、何よりも、私が一番素晴らしい道を歩むことを望んでいらっしゃる、と信じればよいと思います。そして、そのためにふさわしい道を開いてくださると考えるのが信仰ではないでしょうか。

ありがとうございました。